

話題提供者：西岡 裕美 (助教)

演 題：デジタル時代の教室外外国語学習 ICTを使って学習環境をデザインする

開催日時：2020年12月9日, 18:00～19:00

開催方法：ZOOMによるオンライン開催

1. はじめに

日本語で日常生活を送りながら英語を学ぶ日本人大学生のように、外国語学習環境で学習言語を学ぶ学習者の場合、日常生活の中で学習言語を使う機会は少ない (Richard, 2015)。しかしながら、インターネットの発達によって、外国語学習環境で学ぶ学習者であっても、母国にいながら低コストで手軽に学習言語に囲まれた学習環境を作り出すことができるようになった (Chan, 2016; Pasfield-Neofitou, 2011)。こうしたデジタル学習環境の広がりを反映し、近年行われた教室外外国語学習の先行研究においても、外国語学習者がソーシャルメディア、ウェブサイト、動画、外国語学習のアプリケーション、オンラインゲームなど、幅広いオンラインリソースを使って、教室外で学習言語を学んでいることが報告されている (Jurkovič, 2019)。その一方、日常的にテクノロジーを使っている大学生であっても、外国語学習に使えるオンラインリソースを知らない、あるいは教室外で外国語を学ぶためどのようにテクノロジーを使っているのか分からず、教師によるサポートを求めていることが指摘されている (Lai & Gu, 2011; Lai, Yeung, & Hu, 2016)。

こうした先行研究の結果を踏まえ、発表者は日本人大学生に対するインターネットを使った教室外英語学習の支援を開発することを目指し、日本人大学生による教室外英語学習の実態を研究している。本発表の前半部では、教室外で行われている外国語学習方法の特徴と語学力向上効果、教室外学習における learner agency (学習目標を達成するため、学習方法などを選択、コントロール、自己調整する学習者の能力) の役割について紹介した。そして、発表後半部では、発表者が2019年度に行った二つのプロジェクト (1 日本人大学生が高校時代に行っていた教室外英語学習の実態; 2 YouTubeを使って独学で韓国語を学んでいる学習者が学習環境をデザインする過程) について報告を行った。

2. 教室外学習における Learner agency の役割

Lantolf と Pavlenko (2001) は社会文化的理論の視点から、外国語学習者を ‘processing device’ (言語情報を処理する端末) ではなく、自らの言語学習の条件を能動的に

作り出す ‘people’ (人) として ‘agency’ (動作主性) としてみなすよう、提案している。また、Duff (2013) は、learner agency を自らの学習目標を達成するため、学習方法などを選択、コントロール、自己調整する学習者の能力である、と定義している (Duff, 2013)。独学や教室外で学習言語を学ぶ場合、学習者は語学教師から学習リソースの提供や学習支援を受けることができない。このため、教師が介在しない学習環境で学ぶ学習者は特に自ら learner agency を発揮し、学習目標を設定してその目標を達成する上で効果的なリソースを選び、学習に取り組む必要がある。学習者がおかれている学習環境には、affordance と呼ばれる言語学習を促すために使える可能性を持つリソースが多く存在する。しかし、こうした affordance の全てが学習者に使われるわけではなく、学習者が affordance の存在に気づく能力、affordance を言語学習に活用しようとする意欲、また affordance を言語学習に活用する能力、を持っているか、によって決まる (van Lier, 2000, 2004)。発表者が、2019年度に行った二つの研究では、learner agency と affordance の概念に着目し、教師が介在しない学習環境での外国語学習を考察した。

3. 日本人大学生の高校時代の教室外英語学習

大学1年生を対象とした教室外英語学習の支援策を開発する試みとして、発表者は2019年度に大学1年生が高校時代に行っていた教室外英語学習について質問紙調査 (105人)、インタビュー (11人) を行った。その結果、教室外で週に1時間以上オンラインリソースを使っていた研究協力者は、27人 (約26%) に過ぎないこと、また教室外で英語を学ぶために使われている主な学習リソースは、オフラインのリソース (電子辞書、紙媒体の教材、塾や予備校) であることが確認された。また、教室外でオンラインリソースを使わない理由として、受験勉強に集中したかったから、が最も多く、その他にも紙媒体の教材で学ぶことに慣れていたので、オンラインリソースを使って英語を学ぼうと思ったことがないから、英語学習に使えるオンラインリソースを知らなかったから、といった理由が多く挙げられた。この結果を learner agency と affordance の視点から分析すると、研究対象者の多くが、オンラインが提供している教

「人間科学研究交流会」報告

室外英語学習のaffordanceに気づいていなかったこと、また受験勉強に集中したい、慣れた紙リソースで学びたい、という学習者としてのニーズを優先させたことが、オフラインリソース中心の教室外学習に繋がったと考えられる。

4. YouTubeを使った韓国語独学者の学習方法

上で述べた結果とは逆に、learner agencyを発揮しながら、オンラインリソースがもたらすaffordanceを積極的に活用することで、学習者の様々な学習ニーズを満たす学習環境を作り出すことも可能である。発表者が2019年に実施したケーススタディーでは、韓国政府主導の雇用許可制 (Employment Permit System: EPS) を利用して韓国で働くために、YouTubeを使って独学で韓国語を学ぶフィリピン人1名 (Jass) の独学過程を考察した。韓国で外国人が単純労働者として働く場合、EPS-TOPIKと呼ばれる独自の韓国語試験、韓国語インタビューなどに合格する必要がある。独学で韓国語を学ぶことを選んだJassのオフラインの学習環境には、こうした試験の出題方式や勉強方法について助言してくれる専門家や、これらの試験に特化した韓国語を教えてくれる教師や教材はない。このように不利な学習条件にあったJassだが、EPSに合格し韓国で働くYouTubersの助言やYouTubeのお勧め機能を利用しながら、EPSに特化した学習内容を決めて学習リソースを探し、EPSに合格するための学習環境を構築していった。

5. まとめ

インターネットは、教師が介在しない学習環境での外国語学習を促す様々なaffordanceを提供している。しかし、発表者が2019年に実施した研究において、日本人大学生は高校時代こうしたオンラインリソースの持つaffordanceに気づいていないこと、またaffordanceを活用した英語学習法についての知識がないことから、オフラインリソースを中心とした教室外学習を行っていたことが示唆された。こうした学習者にオンラインリソースを活用した教室外英語学習を促すには、大学の授業の中で学習者にオンラインリソースが持つaffordanceへの気づきを促す活動、affordanceを活用した学習活動を取り入れることが重要であると考えられる。

発表者が2019年度に実施した研究プロジェクトは、早稲田大学より支援を受けた特定課題研究 (2019C-603, 2019E-074) の成果によるものです。

文献

- Chan, H. (2016). Popular culture, English out-of-class activities, and learner autonomy among highly proficient secondary students in Hong Kong. *Universal Journal of Educational Research*, 4 (8), 1918-1923.
- Duff, P. A. (2013). Identity, agency, and second language acquisition. In S. M. Gass & A. Mackey (Eds.), *The Routledge handbook of second language acquisition* (pp. 428-444). New York: Routledge.
- Jurkovič, V. (2019). Online informal learning of English through smartphones in Slovenia. *System*, 80, 27-37.
- Lai, C., Yeung, Y., and Hu, J. (2016). University student and teacher perceptions of teacher roles in promoting autonomous language learning with technology outside the classroom. *Computer Assisted Language Learning*, 29 (4), 703-723.
- Lai, C., and Gu, M. (2011). Self-regulated out-of-class language learning with technology. *Computer Assisted Language Learning*, 24 (4), 317-335.
- Lantolf, J. P., & Pavlenko, A. (2001). Second language activities: Understanding second language learners as people. In M. Breen (Ed.), *Learner contribution to language learning* (pp.141-158). Oxford: Oxford University Press.
- Pasfield-Neofitou, S. (2011). Online domains of language use: Second language learners' experiences of virtual community and foreignness. *Language Learning & Technology*, 15 (2), 92-108.
- Richard, J. C. (2015). The changing face of language learning: Learning beyond the classroom. *RELC Journal*, 46 (1), 5-22.
- van Lier, L. (2000). From input to affordance: Social-interactive learning from an ecological perspective. In J. P. Lantolf (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning* (pp. 245-259). New York: Oxford University Press.
- van Lier, L. (2004). *The ecology and semiotics of language learning: A sociocultural perspective*. Norwell, Mass: Kluwer Academic Publishers.